

# 文化高知 2

## 文化について思うこと

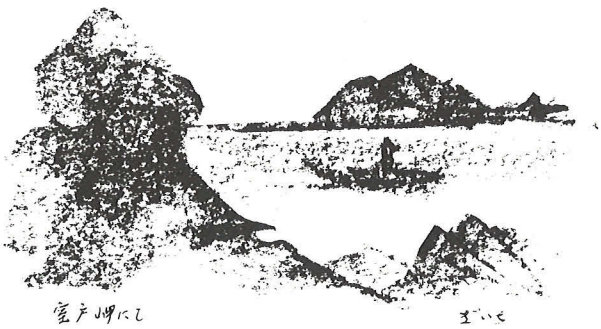
木原正雄

今日、わが国は、自由世界で米国に次ぐ第二の経済大国になり、豊かさが自慢され、高度先端技術を誇る国になった。日本人として、誇りうるものがあるのは嬉しいことである。なるほど、高度成長政策の下で、生産力は急速な発展を遂げた。家電製品も自動車も世界一の生産を誇ることができるようになった。しかし、手放して喜こんでよいのだろうか。外国では、日本をエコノミック・アニマルなどと呼んでいる。また、日本の住宅は「兎小屋」とも言われている。われわれが本当に自慢し誇ることができるのは、経済大国や高度先端技術自体ではない。豊かさの尺度は、経済大国であることが、また高度先端技術が、どれだけ人類の発展、人間の福祉向上に貢献しているかということでなければならぬ。いいかえれば文化の高さである。

このような尺度で照らしてみると、わが国は経済大国として、胸を張って誇ることができるだろうか。なるほど、高度成長の結果、生産力は異常なともいえる発展を遂げたが、われわれの生活環境はどうだろうか。何かしらチグハグである。公害や環境破壊がす

み、過疎過密が起り、いろいろのひずみとアンバランスがみられる。文化的と言うにはほど遠い。

科学技術の進歩により、われわれの



室戸岬にて

まいて

カット 島村義一

生活は便利になった。ところが便利さは、逆に人間の思考力、判断力を麻痺させてはいないだろうか。自動車の普及は交通渋滞を引き起し、貴重な時間の

浪費を伴っている。物質的豊かさを充たすため、ローンはますます普及し、果てはサラ金にまで厄介になる生活が豊かな生活と言えるだろうか。昔から高利貸しはあったが、今日ほどサラ金という名の高利貸しが巷に氾濫しているようなことはなかった。ローンによる物財の充足は、他方では不断に精神面での緊張と不安を増幅している。今日の産業は「重厚長大」型から「軽薄短小」型になったといわれるが、われわれの生活まで「軽薄短小」になつてはならない。

経済大国として本当に自慢することができるとは、経済の発展とともに文化の向上が伴わなければならない。科学技術の折角の成果が、自然の破壊を促進し、資源の浪費を伴うようなことでは、文化の向上はありえない。自然は一度破壊されれば再びもとにはもどらない。

文化とはわれわれの手のとどかない、なにか高尚なものではない。文化は、われわれが生活のなかから造り上げていくものである。祖先が残してくれた遺産を大切にし、新しい文化を築いてこそ、世界に誇ることができるのではないだろうか。高知県は遅れていると言われるが、残された自然、遺産を大切にし、「文化高知」として誇りうる発展の道を考えるべきではなからうか。

(高知女子大学学長)



# 高知論と文化の基軸

米倉 守

「文化」といわれると萎縮してしまう。文化の時代、地方の時代などといわれ、日々「文化」という欄に原稿を書いていながらである。ある種のうさん臭さと名状しがたい恐ろさがつきまとう。

いま秋、虫の音というが、声を聞くともいう。誰もがそのようにして自分を想い、季節の流れを感じるのとはごく自然なことだが、しかし自然ではない。虫は声など発していないからだ。虫の生理に伴なう声として聞くことのなかに、人間の秘密というより言語の秘密がひそんでいる。虹の七色も同じである。虹は七色ではない。にもかかわらず七色というのは、色によってではなく言葉によって虹を見ているからである。

自然に親しむという。しかし、人は自然にではなく、自然を通してむしろ言語に親しんでいる。文化も同じように思う。自然に親しみるのは「文化人」だけだ、というもつともらしい逆説が、人間とその言語の秘密を語っていると思う。芭蕉が見たのは自然ではない。先人の足跡、名所旧跡を、すなわち先人の意図し

たこと、言葉を見たのだと思う。

現代人はどうかといえ、現代人もまた自然そのものではなく言葉を見ている。自然に親しみ、自然そのものを見ようとする人であればあるほど、逆にその背後に言葉を見ようとしている。自然科学者として同じである。

このような疑いそのものが言語に負っているのではないか、というさならなる疑いを孕んでいる。言語について、いや文化について考えるときは、あらゆる自明性を脱ぎ捨てなければならぬのである。うつつうしいのだ。

自転車取材した高知は現在の僕のあらゆる原点を養い、育てていたのだ。現場である。東京を考えると高知を考えると同じであった。最新、新しい視座での「東京論」がなぜ書かれ、生まれないのか、と思いつらねている。パリ、ニューヨークとの比較、反映としての東京ではなく、香港などと合わせての「TOKYO論」である。

現代の文明は欧米という一つのモデルに従ってきたのではなく、ヨー

ロッパ（伝統）とアメリカ（機械）という二つのモデルに直面しつつ、それらを混合した形のまま受けとめてきた。文化の基軸となる生活様式に安定性がないのは、機械という能率性を軸として様式を決定するのがあるいはヨーロッパ日本の伝統を軸として様式を決定するか、いずれでもないまま混乱のなかにいるからだろう。

久しぶりに今夏高知を訪れ、その変容ぶりと活気、洗練度に驚いたが、一種の疲労と不安定さを感じたのも事実である。

生活文化の基軸をどこに置くのか（もちろん高知だが）、混乱で東京論のない東京なのか、伝統を軸とする京都なのか、国際文化の横浜・神戸なのか。これらが入り込んで高知の現代をつくり、ふしぎな「東西折衷」をつくって息づいているかに見えた。東京を考えると高知を考えるとことになると思うのは、僕にとつては東京文化と高知文化は言語のうえで地口をびたりと合わせているからである。

文化は切り売りがきくから、ごっちゃませ入交り（こんな苗字が多かった）もよいが、これからの軸はどのあたりを主軸として、整理、展開させていくのか、ということが、このような財団を生ませたのではない

## よさこい鳴子踊り

小松 弘愛

私の祖母は、老人病棟で寝たきりになり、耳も聞こえなくなっていた。それで、枕もとに筆談ノートを用意しておいた。

ある日、病棟に行くと、そのノートの若い看護婦さんの次のような文字があった。

「きょうは、よさこい祭り。若者も年寄も踊りまわっています。おばあちゃん、踊りに行こう！」

踊ることはもちろん、もう祭りをみることもできなくなった老女に、こう語りかける看護婦さんのやさしい心づかいがうれしい。私はそのやさしさに応えるためにも、今、目の前にいる老女たちを祭りの場に連れ出してやりたい、と思った。むろん、



カット 坂田 和

作品の中においてである。というのはその頃、私は病棟の老女たちのさまざまな老いを素材に、連作詩篇のようなものを書いていたからである。私はよさこい祭りの二日間、夕方になると町へ出かけた。追手筋や中央公園の審査会場、あるいは、あちらの町こちらの町へと踊りを見てまわった。

耳をつんざくロックバンドの山車、アクロバットのような動きを見せる纏持ちの男、片肌ぬぎで踊る女子学生の肌を流れる汗、……南国にふさわしい、ダイナミズムに満ちた踊りで楽しかった。

しかし、一方で最近の踊りが「じんまもばんばもよう踊る」の歌詞を踏み砕いてゆきそうな「力」に支配されていることに異和感を覚えたのも事実だった。「ヨッチョレヨ、ヨッチョレヨ」のかけ声に、「老女たちは跳ね飛ばされそうだ。現実には踊ることのできない「老女たち」を、想像の世界で踊りに連れ出そうとしたのも、「じんまもばんばもよう踊る」の一行に惹かれるところがあったからである。

ことばと実態が離れすぎるのは、あまり健康とは言えない。「よさこい鳴子踊り」は、例外と言えるだろうか。

（詩）人 高知学芸高等学校教諭

## 農民の足跡

松本 瑛子

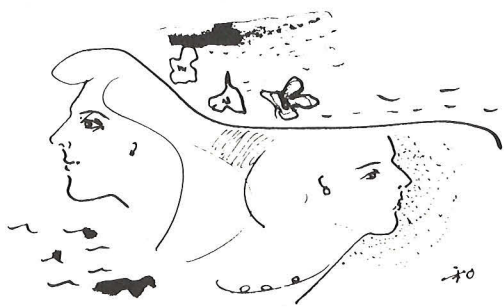
「鹿太郎夫妻は温厚にして勤勉進取の気性に富む、柳行李の職人より身を起こし長年に亘り大工の棟梁をつとむ。長男登の急逝を機に大阪より帰郷、五十三才の時自作農となりいち早く動力機械や三輪車を取り入れ米づくりを中心に多角経営をなす」と云々。

これは中筋川流域の江の村（中村市）に生まれた一農民が、その父の墓石に刻んだ一文です。この地域は昔から洪水の常襲地帯で不安定な稲作農業を補うために柳、藺草の栽培や養蚕などに生活の糧を求めてきた土地柄です。この人は明治・大正・昭和を生きていできた人ですが、墓碑文にもあるように人生の折り折りにおける生業のあり方が、その地域の歴史とともに浮かび上ってまいります。高位の人の碑文にはない、こうしたささやかな碑文も捨てがたいように思います。

話は一転しますが、大豊町の桑名家には沢山の古文書が保存されており、その中に寛政頃の百姓九左衛門という者の不埒の廉々を記し

だろうか。美術館が各地に誕生するから美術館を、野外彫刻が全国に設置されつつあるから野外彫刻を……式の展開ではなく、自らの意思で、文化の基軸を独自にきめて、その主軸に沿って構想してゆくことが望まれているのだろうと思う。

それは、高知の方々の「生きる流儀」であり、姿勢それ自身ということになるが、その基軸を示す現場が設定された僕が解している。いささか抽象的にすぎるのは文化をこれまた言語に負いすぎるからである。新しい視点の「高知論」がこの現場から表わされる予感がするのである。



カット 坂田 和

（朝日新聞編集委員）

た一片があります。九左衛門は本田一反、新田四反を耕作する百姓で、また村の仲間地を宛作していました。ところがある年から作蔵という者が彼に替ってその地を宛るようになつたのに立腹し九左衛門が作蔵に乱暴をしたこと、さらに隣家との合境を奪い取り、石垣を築いて田地にしたこと、荒地を開き勝手に大道を付替え、麦作をしたこと等々を生々しく記録してあります。

つまりこの文書には、糞の広さも余さず「耕して天に至る」棚田の背後に、九左衛門ら農民が営々と耕しある時は紛争の種を蒔きながら強かに生きた姿が描かれております。封建的諸負担を完納するため彼らは新開地に積極的に換金作物を栽培するわけですが、それは却って農村を貨幣経済にまきこみ封建社会を土台で崩す役割りを担うことになりました。田螺のように泥まみれになって、貧乏に喘ぎながら、割りに合わない百姓を黙々と続けた人たち、彼らこそが歴史を作ったのだと古文書は語っています。

漸く深まりゆくこの秋、墓石や古文書を探ねて、さまざまの過去を背負って生き続けてきた人たちの軌跡と歴史をこれからも私は学んで行きたいと思っております。

（高知西高等学校教諭）



# 文化の分散化を

— 四万十川ブームをかんがえながら —

片岡文雄

いま目の前にくりひろげられている現象から、将来に向かって何をどのように抽出整理し、体系化し、何を収穫していくか。どのような方面のことであれ、これを構想していくことはとても難儀なことではあります。しかし、現象そのことに目をうばわれることよりも、このことをきちっと取りおさえていくことが、少なくとも大人がやることとしては肝心なわけですから。ところがわが高知県では事態はおよそ逆でして、思考の練りと想像性ないし構想性に欠けた大人で占められているのが、残念ながら実情のように思われます。それがために、組織、団体、個人を問わず、少ない収入に反して大きな支出の犠牲を払っているともいえそうです。

たとえば、今年は例の「日本最後の清流」とうたわれてNHKテレビが四万十川ルポを再三にわたって全国放映してくれたので、これをきっかけに一種の四万十川ブームという

のが起こったのはごぞんじのとおりです。

では、ブームの中味とは何であったかをふりかえってみますと、予土線にトロッコ風展望車が走って耳目をあつめたこと。若者たちによるイカダ流しが例年になくさかんだったこと。アンアン、ノンノの娘さんたちも土佐の小京都中村へとかなり来てくれた。地元ではビールとアユの塩焼きなどによる納涼船もいつになくにぎわって、よくニコニコ顔がテレビの画像として映し出されていたわけです。

学術的な関心をそそることとしては、アユの生態やその短い生涯がカメラで十分に記録され、またヤイロ鳥の育雛も撮られたこと。個人的には中村市の若い杉村光俊さんが私設のトンボ博物館「トンボ・ギャラリ」を開設されたことなど、貴重な成果もあがっています。

そういうこととか、ほかに私が記憶からこぼしていること、また水面

いったん帰宅していたものです。

ですから、私は四万十川ブームとはいっても、他所の人にとってのレジャーの対象となるのではなく、まず土地の人の、四万十川流域の人々のくらしの向上に直結するブームになってくれないか、と願っているのです。

四万十川上流域に西土佐村があります。大正町、十和村などと合せて北幡地方とよんでいます。その西土佐村に住む二十代の無名の女性詩人だった大森ちさとさんが、今度土佐出版から詩集『川にな』を出しました。そのむすびをなす作品「沈下橋をわたる」は左で全文です。

沈下橋をわたる  
道から深くおちこんだ  
沈下橋をわたる  
せせらぎが聞こえ  
まん中までくると  
生暖かに身体に  
奇妙な風が吹き

川はひんやりとした目で  
わたしを見あげている  
肩を突かれれば

流れてゆくだけの  
棒であるかのように

はなやかで、きらびやかなものはまったく認められません。しかし、北幡地方の風光と人々のくらしを知っている人なら、中村市から上流に架かる橋は、原始的な渡し舟の時代から一歩前進しているとはいえるものの、橋のほとんどが永久橋ではなく、洪水となれば冠水沈没する沈下橋であることを覚えておられるはず。それがために尊い人命がうしなわれたことも再三にわたっているのです。同時にこの若い女性詩人が無意識のうちに伝えているのは、詩の後半にうかがえますけれども、四万十の流に目を落しても、明日への飛躍的なくらしの手だては見出せない。そのかなしみをこの詩がたたえていることです。ブームは他所の人にとってのもので、あちこちに散らかされた空きカンのような空虚感が残されていなければ、さいわい。

ところでその効果やメリットがどのようなところにあるのか、他所者の私に言う資格はないのですが、支流の中筋川ダムが完成したあかつきには、本流の河口に近い帯はこれまでのような原初性は保てないにちがいありません。たとえば四国一の

下にあつてまだ表面には見えていないことなども多かろうと思うのですが、たしかに四万十川ブームは形成されはじめています。結構なことだと思ふのです。にもかかわらず、この四万十川ブームという現象の実質を、もう少し冷静に整理してみる必要がありそうです。

これは私一個のかんがえであつて、真実を突くことになるのかどうかはわかりませんが、そもそも「日本最後の清流」といううたい文句に不安をもつのです。新聞、雑誌そしてテレビやラジオにしても一種の四万十川讃歌としての色彩をおびて用いられているわけですから。これを見たり聞いたりする高知県民は、何かくすぐったくもあるが、そのくせこの語句のもつ響きにうれしさをかくしきれない。とりわけ幡多地方の人々にとっては、日頃高知県のくらしが高知市といった東部寄りを軸にしてくりひろげられているから、胸のつかえがおりた、といった心情をもともなうかも知れません。

しかし、これはあぶない。私は予言者ではありませんから、あるいはまちがうかも知れないのですが、「日本最後の」ということは、これでもっておしまい、というニュアンスを含んでいるはず。いまは清流だが近いうちにはダメになるのかも知

大河吉野川上流に早明浦ダムがつくられ、池田ダムができて水量が変わったために河口域では塩水化がひどくなり、河川漁業の内容も激変してきます。四万十川が「日本最後の清流」とよばれる背後には、この吉野川のような運命が控えているとかんがえておくべきでしょう。

私は四万十川のことに就きすぎましたが、申し上げたいことは、高知県の人々全体がバランスのとれたかたちでくらしをいける目くぼりをしたいかねばならないということ。とくに高知市が一点集中型で、ミニ東京として何もかも独占的に所有することはいましめなければならぬ。高知市から東にも西にも、また山間部にもそれぞれ固有の文化施設があり、富の分配があつていい。ノコギリ館でも、川舟館でもいい。強引な言いかたで恐縮ですが、高知大学も手狭になったので、この際中村市か安芸市に国の費用で移設し、跡地は個性のある私立大学が出現するがい

い。現今の学力が低いという。しかしこれは戦前からの統計にあらわれていることで、住民の生活レベルと連動しているはず。短大卒の先生が多いといつて、なじる。それならなぜ実質収入が全国最下位といえる県民が、地元で四年制大学にかよえる器

れない、といった解釈も可能ではないでしょうか。つまりは四万十川ブームとはその裏に「四万十川は大丈夫か」といった問いを介在させないと、ホンモノにはならないということです。

過ぎた今年の夏のブームにかぎつていえば、他所からいつになく四万十川を見にきたということ。それで、地元はこれをテコに四万十川流域のくらしをもう一歩高いところへ持っていく手だてを確かなものとしたかどうか。どうもそれは、はっきりしなかったのではないかといいることがあります。大都市生活者や他所の人に来てもらい、「日本最後の清流」にくつろいでもらうのはわるいことではない。しかし、そういう人々を迎えることで、土地の人にとっても何が前進したことになるのかどうか。昭和三十年代前半に三年間を、私は高知市育ちでありながら中村市でくらししたので、幡多とその人々への愛着はつよいのです。なんとといっても幡多の人たちの生活がよくなつてもらいたいのです。

その当時、もう高知市にある高校などでは戦後の貧窮は少しずつ解消されつつあつて、生徒は制服にズック、弁当持参でした。ところが中村高校ではまだゲタバきが多く、昼は教員も生徒もまずしい食事のために

の用意をしないのか。大学進学率はこういうくらしの困難さのなかで全国でも28位か29位と、異常にがんばっているのです。スポーツ立県を宣言しながらの国体の天皇杯皇后杯の順位と比較してみるといいのです。県民が、さまざまの領域で自由と平等と友愛を分かちあえる集中型から分権型への工夫をこらしたいものです。そのために高知市が新鮮で固有な文化を有して、よい刺激をあたえていくのは、大いにのぞむところ

（日本現代詩人会員  
県立佐川高等学校定時制教諭）



四万十川 NHK高知放送局 提供



## さまざまなお出合い

北村霞代子

白い台紙に色鮮かな和紙をちぎり、糊づけしながら重ねる。油絵の重厚さ、日本画の繊細さを意のままに表現し、美の世界を描きだしてゆく。四年前、高知を福島の岡山に出掛けました。そこで、この道の第一人者の亀井健三先生に出会い、教えるを受けると同時に、土佐の手漉き和紙の素晴らしさを説かれました。「土佐典具帖紙」という手漉き和紙は、他の和紙と違って半透明の性質を持ち、重ねることでの階調が自由に表現できる、ということでした。



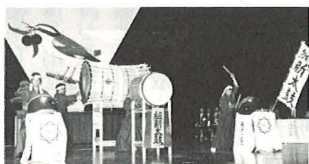
土佐典具帖紙

当時、「土佐典具帖紙」の職人、伊野町の浜田幸雄さんは、立派な技術を持ちながら、和紙の需要がなく、土木作業等に從事してました。行政は伝統技術の保存には熱心ですが、それを生かした需要の掘り起こしや製品の販売には不熱心で、せっかくの伝統技術がむざむざ野に遊んでいく状態でした。

浜田さんが亀井先生と出会ってからは、注文が舞い込み、国内はおろか、外国からも引きあいがあるようになりまして。海外では古書の補修用の紙として注目を集めています。私たちにしても、郷土の優秀な和

## 龍馬維新太鼓

和田義許



和太鼓の大きな響きは、何ともいえない和やかな気分を醸しだしてくる。小太鼓のリズムは心切れる。良い音は心を浮き立たせてくれる。

龍馬には青年を呼び集める不思議な魅力がある。大政奉還、船中八策は龍馬の独創とはいえず、それを可能にした多くの同志がいた。昭和初期の青年は龍馬の銅像をつくり、半世紀後の青年はその台座の修復をした。そして、修復のために集まった青年の有志が、「いつまでも伝えたい、龍馬の心と生きかたを」を合言葉に、この和太鼓の合奏チームを作った。

音楽に多少の経験があるとはいえず、指導者はいない。自分たちで曲想を練り、譜面におとす。試みに大小の太鼓を打ち、曲のイメージを広げる。やさしさを、強さを、そして静けさを曲に託す。メンバーが集まって実演に入る。なかなか楽譜どおりの合奏にはならない。繰り返し、繰り返し練習するうちに壁を突破して曲が完成する。一曲が演奏できるまで、二、三ヶ月が経過する。来年の龍馬生誕百五十年にあわせて曲づくりを急ぐ。最初の曲「維新三傑」に続き、「土佐の四季」、風景と土佐に生きる人々のイメージを表

## 一味違ったカルチャー・サロン

高知ワシントン・ホテル

地方に住んでおると、テレビや雑誌などでお目にかかる第一線で活躍の方々と、実際にお逢いして話をする機会がほとんどありません。講演会があっても三百人、五百人という多勢の会場で、壇上から教えるを垂れる。聞く方は拝聴仕る。これではメディアを通して接するのと大差ありません。それもまた大事なことでしようが、単に受身でなく、わたしたちがもつと積極的に、身近かに先生方と交歓できる場が意外に少ないですね。そんなことから「水曜日の部屋」が誕生したんです。

講師の先生方、というよりもお客様という感じです。今のところ東京大阪中心ですが、これからは九州や東北など全国各地で、すばらしい生き方をされている方々のお話が聞けたら、もつと世界が広がってくると思っています。

月二回、一回二時間ですが、先生方と共に三、四十人、お茶とケーキを召し上りながら、和気あいあいと話し合え、そんな身近かな体験を通じて、楽しい世界がまたひとつふくらんでいきます。  
(談・月刊「土佐」和田牧代)

## くろしおコンサート

大野けんじ

くろしおコンサートは、五年前、市と青年団体との話し合いで誕生しました。話のテーマは青年向けの余暇活動でしたが、受け身の活動でなく、何かを作り発表する文化活動を指向して、このコンサートが着想されました。そして、青年だけの催しにするのではなく、幅広い年代層に参加をいただくために「高知の詞」を公募することになりました。

私は、当初から運営にかかわっていましたが、司会他に「高知の詞」の優秀な歌詞に曲をつけています。地元の風物や人情を地元人間がとらえ、土佐弁をまじえた歌はユニークなものが多く、愛唱してほしいと思います。また、「鏡川」や「華山」や「日曜日」といったテーマで歌詞を募集しようと考えています。来年は龍馬生誕百五十年にあたりますので龍馬を題材にします。あなたも挑戦してみませんか。

このコンサートに出演するには自作の曲に限ります。カセット・テープによる予選で水準をととのえ、オリジナルティのあるもの、流行を消化した作品を舞台にあげています。昨年は丁度「くろしお博」出演の予選をかねたので、意欲的で迫力のある演奏が楽しめました。

このコンサートを踏み台にして、序々に中央のコンクールに挑戦するバンドもではじめました。近い将来漫画家の青柳祐介、シンセサイザーの喜多郎のように、地方にあって中央で大きな仕事のできる才能が現

紙の存在に気づかず、県外にそれを求めていた反省を込めて、土佐和紙の宣伝に努めています。



ともあれ、良き指導者と優秀な和紙を得て、高知和紙ちぎり絵サークルには爆発的に入会者があります。また、県内外での発表会や交流活動が活発で休む間もないほどです。ちぎり絵の手作業に着目したある

わした組曲「九十九洋」の三曲ができた。九十九洋とは土佐の南の海岸の古称である。土佐の先人の生き方、土佐魂の継承をめざして発足した創作太鼓「龍馬維新太鼓」を今日も打ち鳴らす。  
(土佐の国龍馬維新太鼓振興会代表)

病院の先生から、身障者のリハビリテーションに役立てたいので教室を開いてほしいという申し込みもありました。目下のところ、そこまで手が回わりませんが、いずれ指導者を育成して取り組みたいと思います。  
(高知和紙ちぎり絵サークル 主筆)

## 主体性喪失

いろいろの機会があつて、他県から高知に来て住んでいる人たちの、多くの意見を聞くことができた。いかなければ外から見た高知県人評であるが、興味をひいたのは彼等からみると、高知県人はまことに「議論」と「呑むこと」が好きなもの集りにみえるらしいが、彼等が共通して言っていた次のことも見逃せないと思つた。

彼等が共通して指摘する高知県人の特色の第一は、口では「協同」の重要性を説きながら、いざとなるとこれが下手である、というより足のひっぱり合いをしているのはどういふことかというのである。「協同」ということは、「おしん」ではないが、辛抱である。高知県人は全くこれ

## 風伯

が不足しているというのである。またいい素材を沢山持ちながら、それを十分に生かす自らの努力をしていないという。加えてなんでもうまくいかないのは行政の責任だと行政を悪者にしてはいるのだが、彼等はこれを、本音はむしろ行政依存型でその裏返しがかうなっているのだとみている。

いまひとつ、高知県人のねばりの無さとあきらめの早さにはあきれたという。高知県は、「いごっそう」が畏敬されているところだけに、さぞや気骨に富む人が多かろうと想像していたが、どこにその気骨があるのかと疑いたくなるほどだという。短かさの裏返しだが、南方特有の「はそさ」になつてはいるのだろうか。耳の痛い話もあるが、反省の材料にしていい意見ではないか。(華)

## 史料学?

土佐は昔から歴史研究が盛んで、その業績も多い。特に藩政時代における史料の編纂事業では、他県に誇るべき仕事が残されておられ、現代史学も恩恵を蒙ること大である。しかし、いわゆる郷土史上の業績は別として、一人物の築いた学問、ないし著述でこれが学問だといわれるほどのものはそうそうあるわけではない。筆者の見るところでは、さしづめ鹿持雅澄の「万葉集古義」あたりが先ず、日本的な学術業績としてあげられるように思う。

さて現代の学術者の作法についてだが、これは土佐に限らず、日本の学者全てに亘つていえることだが、どうも史料偏重が目立ち過ぎるよう思う。それも結構だが、単に史料

を編むというらしいのやり方でもう学問をしたと思う史家が増えてきていく。限られたもののなかからその主題に該当する史料を見つけてきて論を構成する。それでも不足すればいわゆる孫引きで片をつける。したがって付録にぼう大な註を構えなければならなくなる。まるで註が多いほど立派で学問的だとさつかくする者さえある。史料かならずしも全部が正しいわけではなく問はずしや視野の狭さがあることも忘れてはならない。



十一月十五日(木) 午後六時から 県民文化ホール 入場無料 連絡先 商工労働課 電話 〇八二一 内線 四三七

もつと史料との争いがあつていいと思う。一つの史料が誕生する為には、その背景の事情も、又、史料化されたところの願望もある筈である。それには史料の鑑識眼をさらにく養う必要がある。(史外)



## スタートする

### 二つの文化事業

財団では、特色ある高知文化の創出とレベルアップ、学術の振興を目的に、新しく二つの事業を設けました。概要はつぎのとおりです。

#### 学術研究助成事業

すぐれた学術研究が地域の産業、教育、文化の発展に寄与している意義を高く評価し、その研究活動を一層促進するとともに、こうした研究活動を幅広く市民のものとしていくための事業です。

助成の対象は、高知市に在住する個人や機関、団体等の行う学術的な

現代芸術に大いなる影響を与えたガウ

デーの建築群が、いま甦える。

武満徹の全篇音楽を得て、

勅使河原宏が映像詩を

完成!!



主催 高知市文化振興事業団

11月20日(火)・RKCホール

①13:00～②14:30～③16:00～④17:30～⑤19:00～

チケット発売所 県民文化ホール/高新プレイガイド

前売券1,000円 当日券1,200円

調査及び研究、もしくは、その課題が、本市又は本県に關係のある学術的な調査及び研究で、研究計画書を出していただいで審査した上で決定します。助成金は、当該研究に必要な経費のみとし、一件あたり二十万円から五十万円までです。大型の研究については別途検討します。

#### 文化活動支援事業

本市の文化活動の伸長のために、自主的な研鑽と交流活動を支援し、特色のある市民文化の創造に寄与することを目的として実施するものです。

対象は、特に発展が望まれる分野、著しい伸張が期待される分野の、独自の、創造的な研究や発表活動で、団体等の場合は原則として共同企画であるものに限りません。また、地域

で行う文化活動及び伝統文化の保存継承活動で、その内容がユニークで他のモデルとなる場合も対象とします。

つぎの場合は対象外となります。

○すでに行政等から補助を受けているもの ○単独の発表会 ○団体等の運営的な経費 ○市外で行われるもの ○営利、宗教、政治的な色あいの濃いもの

助成金額は、必要経費の二分の一以内で、上限を三〇万円とし、申請書を審査した上で予算の範囲内で決定します。

\* \* \*

助成を受けた方は、いずれの場合も、財団の定める様式で、それぞれ「研究計画書」、「申請書」を提出していただくことが必要です。詳細については、財団事務局までお問い合わせください。

なお、財団では、移りゆく郷土の自然、風土、生活習慣等を記録保存するため、「ビデオ・コンテスト」、「写真コンテスト」等の事業も計画しています。

また、来年が龍馬生誕百五十年にあたるため、関係機関と連係を密にしなが、一連の記念事業について検討を進めています。

これらについて、ご意見、ご提言等、お寄せいただければ幸いです。

## あとがき

▼朝夕の冷えこみとともに、芸術文化の秋も深まりました。財団も発足して五ヶ月が経過して、多岐にわたる市民の文化と接触して水面下の動きを続けてきましたが、事業の形で表面にあらわれる部分もでてまいりました。それとともに、市民図書館三階にある事務局を訪れる人がふえ、活気づいています。

▼ある日、一人の市民から、高知ではなかなか見られない芸術映画を上映してほしい旨の要望がありました。内容を調べたり、関係者を捜したりしているうちに大きな出会いがあり、映画『アントニー・ガウデー』が市内の芸術家、建築家、華道家たちの協力を得て上映のはこびとなりました。財団としては初めての対外的事業であり、鋭意開催に向けて取り組んでいます。

▼「高知県方言辞典」の編集者の一人である土居重俊先生は連日おおいになり、原稿に最後の手をいれられています。辞典の刊行にあわせて講演会やシンポジウムを、との声もあり、方言についての新たな動きも期待できそうです。

▼「文化高知」の第二号ができました。今後、開かれた文化情報紙として成長してゆくに投稿欄を設けます。率直なご意見や、文化活動の情報などをお寄せください。

財団法人 高知市文化振興事業団

〒780 高知市本町五丁目一番二十号

高知市民図書館内

TEL 〇八九六〇 四三二六五